

貝原益軒の大疑録

桑木彥雄

大疑録は、益軒が正徳四年（西暦一七一四年）八月二十七日八十五歳を以て歿した、その二月前に完成したという、益軒の最終の著述であり、又、益軒は中年以後朱子学者として当時一般に知られていたが、晩年の此著に於て初めて程〔程顥・程頤〕朱〔朱熹〕の性理学に関する疑を記し、独自の学説を述べたということなどに依り、益軒百有餘種の著述の中でも特に重要視されている。この書は明治四十三年益軒会発行の益軒全集第二巻に収めてある。

然し、全集の凡例等に依れば、この書の益軒自筆本等は残存せず、伝写本と、明和四年（一七六七年）の江戸須原屋木版本（以下「明和本」と略称す）とに依つて編輯したようである。私は数年前偶然、大疑録上下二巻美濃判五十餘枚の、木活刷で、所々缺字を朱書し、誤字等を訂正してある、上記明和本の校正刷らしきものと、「敬所先生講書」と記し、書人のある明和本とを、一は神田で、他は大阪で購得した。好事的であるが、夫等と全集との異同等について次に記してみる。先ず明和本には、大疑録本文の初に、筑前貝原篤信著、仙台大野通明校とあり、本文の前に、明和丙戌（三年）季秋と日附のある通明の序と、太宰春臺の「続損軒先生大疑録」（損軒は益軒の別号）という一文とを加えてある。全集の大疑録本文はこの明和本そっくりであるが、全集には、明和本中の春臺の文を載せて、通明の序を載せず、別に伝写本に依つて、正徳三年春分日

書という益軒の自序を載せてある。

又、前記所謂校正刷は、大疑録の本文だけであるが、やはり大野通明校とあり、末尾に附箋して、「壬申二月十三日再校畢」と朱書してある。壬申は宝暦二年（一七五二年）再校畢から明和丁亥四年の出版まで十五年は長過ぎ、強て云えば甲申（明和元年）の書違いか、然し証拠はない。なお木活校正刷と明和本と、共に白文、内容同一であるが、字配り等の相違で両者に二、三枚の枚数の差はある。今日の校正刷と本刷との関係とは異なる。

なお益軒は正徳四年の歿年に大疑録二巻の外に漢文の著述二種、慎思録六巻、自娛集七巻を完成しているが、前者は巻首に、正徳甲午（四年）立春日、八十五翁貝原篤信書という自叙があり、同年京都の書肆から出版された。後者は自著文集であるが、巻尾に正徳四年三月清明日、益軒編輯とあり、江戸の書肆発行、巻首に正徳二年の、門人竹田定直の序があり、慎思録に続いて出版されたようである。唯だ大疑録は、其出版を益軒は門人に禁じたらしく思われる（後掲春臺又参照）。依つて其出版は益軒歿後五十餘年の明和本を初とし、又、校者大野通明（号北海）は徂徠の門人で、奥州の人、兵学に聞えたようであるが、益軒とは郷国も学統も関係のなかつた人であつた。通明の序には、一書肆（麿伴寛とあり）が大疑録の写本を携えて来れるに依り、之を読んだところ、文難不可観、而言乃可聴也、然し、写誤頗多衍闕相半、故に、蘭窩先生所蔵一本と比較して繕写して書肆に与えた、とある。「全集」に通明の序を省いたのは是等の文字の故であろうか。

私の偶ま得た明和本に敬所先生講書とあるは、猪飼敬所（弘化二年、一八四五年歿、年八十五）の評を書入れたものと思われるが、通明の序中、前記の場所に頭書し、益軒を辯護し、通明の文章を添削し、大野氏之文、其拙如是、而有此言、可謂不知己者矣とあるのも面白い。又上記春臺の一文は春臺文集に在り、通明は

之を引て解説に代えたのであるが、春臺（延享四年、一七四七年歿、年六十八）は先^まず、損軒先生博学洽聞、海内無比……先生少学程朱之道……及晚年忽疑二氏之言……所録且二万言……名曰大疑録、先生謙恭、未敢示人、と記し、相交われる由美子善（筑前の人、明和九年江戸に歿す、年八十一）が此書を写して所蔵せることを聞いて、再三請うて借覧し、益軒の疑に賛同し、然^しかも益軒が未だ之を排するといふまでに徹底的でないことを論じ、最後に、予觀損軒先生、其学不可及也、至排宋儒、予無畏於先生云、と結んである。書入本、敬所の評には、先生（益軒）断然云、宋儒之教与聖人不同、辨析其非既詳矣、非不得其解也、以大疑名之者、謙辞也、此先生之謙恭所以異於春臺之無忌憚也とあり、又別に、徂徠之餘唾^{いわゆる}所謂無忌憚者などの評もある。大疑録本文に関する敬所の評には、此書往々有訛誤衍脱、其分明無疑者、今直以朱筆竄削補正とあつて刊本の所々に字句の訂正がある。

又、伊藤東涯の説と対比し、益軒の説を迂僻とした所もあるのは敬所の学統の故であろう。又、徂徠集に、徂徠（享保十三年、一七二八年歿、年六十二）が益軒門人竹田定直（春庵、延享二年歿、年八十五）に与えた詩、書数篇あり、一書に、嘗聞貝先生関西夫子也、吁先生不可得而見之矣、得見足下、斯以知先生之教焉耳と記し、又一書に、則知貝夫子有大疑録之作也、ともあり、益軒が朱子学を疑うのに同じて定直に古文辞を説いているのである。

上記中、二月十三日が壬申に当るのは明和五年がそうである。後の参考に記す。

（昭和十一年二月、文藝春秋）

- 桑木或雄著『科学史考』（河出書房、昭和一九年）所収。
- 読みやすさのために、旧漢字は新漢字に、旧かなは新かなに変更し、適宜振り仮名をつけた。ただし、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- PDF化にはL^AT_EX_{2 ϵ} でタイプセットを行い、dvi_{ps}dfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。